

令和7年度第4回みんなでまちづくり推進会議 議事概要

日時：令和7年8月27日（水）19:00～

場所：境港市保健相談センター 講堂

出席 松本幸永（会長）、三原真由美（副会長）、足立勲、遠藤緑、松田真二、宮本剛志、
安原真弓（7名・敬称略）

アドバイザー 毎熊浩一（島根大学法文学部教授）

欠席 池淵匠、河岡雅、舛岡彩子、丸山誉覚、吉田明広（5名・敬称略）

事務局 浜田潤（総合政策課長）、梅谷俊一（同課政策企画係長）、足立麻優子（同係主事）

1 まとめ

- ・第9期の取組テーマ「市民活動推進補助金制度の見直し」について、松田委員より制度全体の見直し方針案が示され、この案をベースとして検討することとなった。
- ・松江市の「まちづくりを考える日」などの事例を参考に、協働の広がりや補助金の周知を目的とし、過去の補助金活用団体を対象とした報告会を来年の1～2月頃に開催することとなった。
- ・募集回数については、現時点では変更せず、もう少し補助金制度の見直しの大枠が決まってから協議することとなった。
- ・緑化事業は、市民活動推進補助金ではなく、別の予算とすることができないか、市の内部で協議することとなった。
- ・松田委員の提案を受け、近年、若者がまちづくりに関わる事業が増えており、境港を若者が気軽に挑戦できるまちにするため、若者の活動を応援する制度をつくるという方向性が決まった。

2 議事概要

（1）事務局説明【資料1】

- ・第9期の取組テーマ「市民活動推進補助金制度の見直し」について、これまでの協議経過や事務局としての見解を説明。条例やこの会議の大きな目的は、「市民との協働」という点を再確認したい。

（2）松田委員からの提案【資料提供】

- ・県内四市の市民活動への補助制度の比較より、境港市は「自主性を重視する仕組み」が特徴だが、持続性や行政との協働、広報等に改善の余地があるため、以下の提言案を提案。
 - ①持続的な市民活動を支える仕組みづくり
 - ⇒活動の定着や拡大を支援する中長期型の補助枠を新設し、市民活動が一過性で終わらない仕組みを整える。
 - ②行政課題と市民活動をつなぐ協働の推進
 - ⇒市の重点政策をテーマにした協働事業枠を新設し、市民と行政が同じ方向で取り組める仕組みを整える。
 - ③活動の見える化と広報力強化
 - ⇒活動を「ストーリー形式（単なる実績報告ではなく、活動の魅力や感想を伝える）」で紹介し、SNS等を活用することで、若者や移住者が共感し、参加したくなるような広報を行う。
 - ④多様な担い手の参画促進
 - ⇒外国人住民や高校生などの若い世代が参加できる小規模活動支援枠の創設を進め、多様な

市民の参画を後押しする。「楽しい×映える×自分の成長になる」の3つをデザインして、若者の参加を促進する。

・境港市が飛躍するためのまちづくりの方向性について

①世界とつながる「海のゲートウェイ都市」

⇒境港市には国際港湾・漁港都市という強みがあるため、世界との交流拠点化を前面に打ち出し、外国人住民とのイベント等を開催する。

②「若者実験都市」構想

⇒若者が「境港で挑戦してみたい」と思うまちにするため、小規模の「ミニチャレンジ枠」を新設し、学生や若者が気軽に応募できるようにする。失敗しても次につながる経験を評価する。

③「海と食」を核にした国際ブランド化

⇒単なる観光PRではなく、「日本一のカニのまち」を世界に発信するなど、境港ブランドを世界市場に展開する。

④デジタルと海洋の融合都市

⇒他市にはない「港町＋デジタル」で未来志向を示す。メタバース等を活用することで、実際に来なくても境港を体験してもらえるため、観光・国際交流の新しい手段になる。

(3) 毎熊アドバイザーからの助言

- ・補助金を単なる補助（サポート）だけで終わらせない仕組みにする。次への波及効果や良い循環につなげていくための仕掛けを、補助金の審査や報告会に結びつけて考えるなど、そういった仕組みづくりにいかにつなげるかがとても大事だと思う。
- ・松田委員の提案は、単に補助金の手続き的な変更にとどまらない問題提起でもあり、方向性も示されているため、委員の皆さんでしっかりと議論されたら良いと思う。
- ・特に若者への支援は面白い。若者が失敗を恐れずに挑戦することを後押しするために、補助金というお金だけではなく、伴走するような仕組みまで用意する、そういった若者向けの補助金を作っても良いのではと思う。

(4) 意見交換

◎見直しの方向性について

- ・補助金を活用した団体のイベント等を実際に見に行き、どういう活動をしているのか実態を知ること、次回の審査での採点につなげてはどうか。(委員)
- ・市民の参加人数など、具体的なルールを決めておくのは良いと思う。(委員)
- ・多様な審査ができるため、点数の開き自体が悪いこととは思わない。(委員)
- ・今の制度ではお金をもらった後のことがよく分からない。松田委員の資料を見て、せっかく補助金を出すならそれで終わらない形にするというところで、今後改善されていくのではと期待を持った。(委員)
- ・補助金をどう変えていくかで、点数の付け方も変わってくるため、補助金の方向性が決まってから、点数の差についても議論していけば良いと思う。(委員)
- ・若者が自由に使えるような補助金について、やらせて終わりではなく、伴走するシステムは良いと思うし、それをうまく回すためにも、若者向けの補助金と一般向けの補助金なども考えていけたら面白いと思う。(委員)
- ・行政がテーマを設定して募集する場合、特色が出せるというメリットがある。一方で、テーマをたくさん決めてしまうと、募集がないところが出てきたり、逆に1つに決めても出てこないこ

ともある。島根県庁では、まず現状で困っている課題など、募集して欲しいテーマを各課から募り、その中からテーマを決める事例があった。他にも、NPO や市民活動団体に手が挙がりそうなニーズを聞いて、それをテーマにするという方法もあるが、確実に手があがるかは分からない。テーマ設定部門はそれなりのリスクがあるが、とても面白いと思う。(アドバイザー)

- ・ここ数年、若者がまちづくりに関わる事業が増えてきたように思う。そういう若者が気軽に活用できるような補助金によって、もっと増えていくと良いと思う。(委員)
- ・若者枠をつくった場合、手があがりそうか。松江の高校などは探究に力を入れていて、色んな子が色んなことをやっているが、境港の状況はどうか。(アドバイザー)
→境高校では、「境考学」という探究学習の時間があり、市の課題を高校生の視点で研究し、成果を発表するといった取り組みをしている。また、JC と高校生のグループが協力し、グルメイベントで出展・販売した例もあり、やりたいと思う子はいらるかもしれない。(事務局)
- ・高校生の手は多分そんなにあがらない。最初は市内の高校だけでなく、市が手をあげて募集しても良いと思う。境港で何かやったという経験があれば、見方が変わったり、愛着を持ってもらえるかもしれない。(委員)
- ・「境港だと挑戦できる」など、他とは違うところは大事にした方が良いと思う。最初は誰かに頼まないといけないと思うが、気軽にやってみたいと思っている子どもを応援したいということを前面に出せると嬉しい。(委員)
- ・若者を応援するというのは非常に賛成で、最初は大人が手助けしないと難しいと思うが、2回目以降は経験した誰かがリーダーとなり、若者同士でやっていけるような仕組みになると良いと思う。(委員)
- ・CS のわいわいトークなど、子どもたちが率直な意見を述べる場はあっても、そこで話して終わる場合が多い。意見を実行するシステムを作っていくのもまちづくりの1つだと思う。(委員)
- ・実際に応募されるかは分からないが、若者向けの枠ができれば、わいわいトークなどで制度を紹介することも可能だと思う。(アドバイザー)
- ・補助金を PR するシンボルマークがいるのではないかな。チラシや看板、ロゴで宣伝するなど、印象に残るような取り組みが必要だと思う。(委員)
- ・詳しい内容などはもう少し詰める必要があるが、若者向けの制度を作るということで良いか。若者枠と一般枠のようなものを次の構想として議論してはどうか。(アドバイザー)
- ・今の制度は維持しつつ、若者枠を来年度に追加してするなど1つの方法かと思う。(事務局)
- ・一般のテーマ設定をどうするか。(アドバイザー)
- ・補助金の対象となる活動については今も設定しているが、申請者がどれだけ意識しているか分からない。明確にテーマを分けるというよりは、境港市が力を入れている課題をしっかりと示し、自分たちの活動がどれに当たるのかを理解してもらいたい。市の行政課題にもつながってほしいということをアピールした方が良いと思う。(委員)
- ・テーマ設定には、100 万円のうち 50 万円は観光振興で残りは何でも良いという形や、総合計画のどれに該当する事業提案かを書いてもらうなど、色々な方法がある。限られた予算でどれだけ有効的に、市民の活動を支援する制度をつくるかどうかだと思う。(アドバイザー)
- ・市の課題等については、全庁に照会して出てきたものをいくつか提示することはできると思う。(事務局)
- ・テーマ設定はプレゼンありで報告会も出してもらうガッツリとした仕組みにして、残った部分は低額で審査を簡素化した仕組みにするという制度設計はできるかもしれない。色々な制度設計ができるため、とても複雑。また、応募する側が事前に担当課と協議し、審査にも担当課が参加する協働を前提とした仕組みとテーマ設定を合わせる方法もあるが、範囲が狭いため応募がな

い可能性もある。(アドバイザー)

- ・今の補助金は何でも対応できて、良くも悪くも使い勝手が良い。NPO の 20 個くらいある活動分野のうちの何番に該当するかなどが明確に分かっていると、審査側もやる側も目的意識をしっかり持ってできると思う。(委員)

◎活動の報告について

- ・松田委員の提案の「ストーリー」のイメージはどのようなものか。(事務局)
→いつ誰がどこで何をどのようにして、感じたとか学んだとか、それを読めば何となく活動のストーリーが思い描かれるような内容で報告するイメージ。「どこで何をした」や「何人集まった」だけだと、雰囲気がつかめない。(委員)
- ・今は申請団体側から「いつ何を何人でやりました」という報告しかない。活動を紹介するなら、参加した人の意見や感想なども分かったら良いと思う。(委員)
- ・報告書のフォーマットはあるのか。(アドバイザー)
→様式は定めていて、その内容を報告集としてまとめて HP に公開している。(事務局)
- ・参加者の感想や写真の添付を必須にするなど、報告書のフォーマットを変えるだけでも、良くなるかもしれない。(アドバイザー)
- ・申請書に団体の事業の目的などが書いてあるが、実際に達成したのかがよく分からない。参加者の声やどのように達成したのかが分かったら良い。(委員)
- ・報告については聞き方でだいぶ変わらと思う。グーグルフォームを活用すると、参加者の声や写真の添付などが簡単に回答でき、取りまとめもしやすい。5 分～10 分のアンケート形式だと声を集めやすいと思う。(委員)
- ・そういうフォーマットがあると、最後に目的を達成したかどうかを書かないといけなくて、目的意識が高まって良いかもしれない。(アドバイザー)

◎報告会について

- ・今は若者向けとテーマ設定が話題に出ている。テーマ設定型にするのか、今の形のままで少しテーマ性を強くするような申請の仕方にするか、合わせて、評価や報告会をどうするかなども議論したい。(アドバイザー)
- ・松江の「まちづくりを考える日」は、補助金をもらった団体が来ることもあれば、そうじゃない先進的な活動をしている団体が来て発表し、多くの方が聞いて、参考にして帰っていくというタイプの報告会で、基本的には自由参加で、出てもらう方には市や関係者がお願いする形になっている。また、島根県庁では、補助金をもらった団体には必ず来てもらい、目的が達成できたか審査するようなタイプの報告会をしていたが、そういうところまでしっかりやるのか。テーマ設定にして担当課と協議するような事業はしっかり評価したいし、情報共有の場にもなるが、当然手間もかかる。(アドバイザー)
- ・1 回目は以前希望調査をした際に、手をあげた団体に出てもらってはどうか。他の団体は自由参加で、一般の人にも声がけをして、色々な人の参考になれば良いし、反省点があれば次回以降改善していけば良い。(委員)
- ・もし若者枠などの新しい制度をスタートするなら、報告会兼新制度の説明会のような形にして、来年 2 月頃などにやってみることはできると思う。(事務局)
- ・提言書を作成する作業と今年度からやってみるというのは、別々に考えても良いと思う。例えば、報告会はこの委員会の一環として今年度やってみれば良いし、提言書にはこういうタイプの報告会を当面やっていき、ガッツリ型の評価も検討していくようなことを書いてはどうか。

若者枠を設けることは予算の時期までに間に合わせて来年度から制度変更するとして、テーマ設定は今後の検討課題として提言することは可能だと思う。(アドバイザー)

- ・ 報告会の最終的なゴールは、自分たちの活動を知ってもらい、他の団体が参考にできるような交流の場になったら一番良いと思う。30万円出した事業はきちんと報告するべきだと思うし、発表だけでなくポスターなど、何らかの形で報告してもらうことをガッツリ型の補助金とセットで考えて欲しい。長期的に継続を目指して頑張るようなところは特に、報告会で発表すること、活動を市民などに知ってもらうべきだと思う。(委員)
- ・ 交流について補足すると、松江市の「まちづくりでつながる日」は、いくつかの団体が抱える課題や目標をまず事前共有しておいて、声かけをして集まった人たちが、その団体の活動をもっとよくするためにはどうすれば良いかを話し合う。繋がりが生まれたり、協働を実現する場になったり、そういう報告会になると良いと思う。(アドバイザー)
⇒報告会は、年度末の1～2月頃に、過去の活用団体に声をかけて実施してみる。

◎募集回数について

- ・ 募集回数については来年から2回で良いか。補助金の審査に時間がかかり、テーマに関する協議がなかなかできない。(委員)
- ・ 申請者ファーストではないが、4回でも良いと思う。計画的に申請する団体もあまりないと感じるし、2回にすると申請する時期を逃してしまう団体がいるかもしれない。2回にするのは誰の負担を軽減するためか。(委員)
- ・ 補助金の審査が4回あると、まちづくりのテーマに関する協議がなかなか進まない。(委員)
- ・ 使いにくくなったとクレームがこないか心配。(委員)
- ・ 4回目の申請は例年1～2件ほどで、件数は他の回に比べて少ない。(事務局)
- ・ だんだん毎年この時期というのが分かってくると思うが、もし4回をキープするなら、額の大きいガッツリしたものは3月と7月にして、4月は小さい規模のものにするのはどうか。(委員)
- ・ 年度内のしびりがあるし、せめて半年くらいはしっかりやってもらう事業に補助をしたいということで良いのではないか。ガッツリ型なら一般的に年1回で、しっかりとした効果をあげるために1年くらいかけてやってもらう。申請者ファーストでいくな、多少効果があれば良く、予算がなくなるまではいつでも良いというやり方もある。その場合、今のような審査はできないため、書面や事務局での審査という形になる。(アドバイザー)
- ・ ある一定の効果を得るなら、年2回くらいが良いのではないか。(アドバイザー)
- ・ 4回目の申請は、「従来からあまり申請がないからやめる」というのが一番スマートかもしれない。(委員)
- ・ 募集の回数はそのまま、大きな事業は1・2回目に申請してもらうのはどうか。(委員)
- ・ 回数については、テーマ型をどうするかなど、もう少し大枠が決まってから話し合うのはどうか。(委員)

◎緑化事業について

- ・ 緑化は環境関係の課や教育委員会など別の予算にすることはできないのか。市としてそれでいいなら、わざわざ審査しなくても良いと思う。(アドバイザー)
- ・ 市の教育委員会と関係のない高校や市民活動団体もある。(委員)
- ・ そういった活動が、市として環境保全に必要なならば、別に予算化してはどうか。絶対に必要な活動に予算を使うのは、この補助金の趣旨として違うと思う。(アドバイザー)
⇒他の課も関係してくるため、内部で協議させていただく。(事務局)

◎まとめ

- ・ 今日決まったことは何か。(委員)
 - 「若者向けの補助メニューをつくること」、「手続きを簡素化した少額の補助メニューをつくること」、「テーマを決めて市との協働事業という形で報告会にも参加してもらうようなガッツリ型の補助メニューをつくること」を見直しの方向性とし、検討していくことが決まったと思う。(事務局)
- ・ 若者を対象としたチャレンジ枠をつくろうという方向性は決まったと認識しているが、具体的な金額や規模等については、予算の時期までに検討していけば良いと思う。(委員)
- ・ 11月上旬の会議を10月末に実施することはできないか。(アドバイザー)
 - 10月27日の週で調整。(事務局)
- ・ 若者枠については、他自治体の事例等を参考にしながら、金額や制度内容などの概要を記載した、たたき台を作成し、提案させていただく。(事務局)

2 その他

- ・ 次回は10月末頃に、「市民活動推進補助金(10月募集)の審査」と「第9期取組テーマに関する協議」を行う。